平成１７年度　第２７回全日本中学生水の作文コンクール中央審査会

【入選】

「水」と生きる

栃木県作新学院中等部　二年　林田　翔

「なんてうれしそうなんだろう。」

僕はそのニュースを見て、驚きとともに、とても温かい気持ちになりました。そのテレビの画面では、新潟中越地震により被災し、避難所で生活している赤ちゃんが、一週間ぶりにお風呂に入る様子が報じられていました。その時の赤ちゃんとその様子を見ていたお母さんのとてもうれしそうな表情は今でも忘れられません。この時、被災地の人々が生きるために一番必要としているのは、「水」なのだと痛感し、人間の生命の根源は「水」なのだと、僕の心に深く刻み込まれました。

その時に、僕は初めて水の大切さを痛感したのです。それまでの僕は、毎日温かいお風呂に入れて、水道のきれいな水を好きなだけ自由に使うことができる、それが当然だと思っていました。でも、僕が健康的で衛生的な生活を営むことができるのは、豊富できれいな水のおかげであり、それがとても幸せなことだと、赤ちゃんの笑顔に教えられたのです。

しかし、僕達に幸せをもたらす水は、時としてとても恐ろしい災害も引き起こします。昨年十二月のスマトラ沖大地震によって発生したインド洋大津波は、僕たちの身長の何倍もある高さの巨大な水の壁となって東南アジア諸国を襲い、多くの人命を一瞬にして飲み込みました。僕はこの災害をニュースで見たとき、「水はなんて恐ろしいのだろう。」

と思い、水に対する感謝の気持ちを失いかけました。津波による被災地の様子が中継されるたびに、本当に悲惨な状況を目の当たりにし、水が汚濁され、救援物資の水が届かず、水不足のために汚水を飲んで病気になってしまった子ども達の姿が映し出された時、かわいそうで、何もしてあげられない自分の無力さに心が痛みました。僕達が、水道の蛇口を開けるだけで使えるきれいな水をわけてあげることができたらいいのにと。

ここで、今、僕達がきれいな水をいつでも自由につかうことができるのは、先人の苦労と努力の長く険しい道のりがあったことを忘れてはいけないと思います。僕は、小学四年生の時に那須野が原に社会科見学に行ったことを思い出し、調べてみました。すると、水と緑に囲まれた自然豊かな印象を強く受けた那須野が原も、昔は荒地で、矢板武さんと印南丈作さんの二人が中心となり、十五年間の尽力と苦労があって那須疎水が完成したことがわかりました。また、資料を読み進めていくうちに、スコップやモッコなどの簡単な道具しかない時代に、人の手によって十六キロメートルもの水路工事をした先人の言葉には表せないほどの苦労を知り、胸が熱くなりました。そして、当時工事にたずさわった多くの人々の汗の結晶であるこの水路は、今も那須野が原の人々の生活と水と緑の豊かな雄大な大地を支えています。きれいな水を使うことができる今日の僕達の幸せな生活は、このような先人の苦労と努力により成り立っているということを決して忘れてはいけないと思います。

今まで、ある事が当然で、何も考えずに使っていた水が、僕達が生きていくためにはどれほど大切であり、ありがたいものかを実感しました。これからは、日常生活上つねに水に感謝して、節水を心がけるよう自分に強く言い聞かせました。世の中には無駄にしていい水などどこにもないのですから。

雨や雪は大地にもどり、地下水となり、また水蒸気として大気中にもどってきます。水は自然界の中に絶えず存在し、僕達の生活用水を供給してくれるのです。でも、水は決して無限ではないのです。きれいな水がいつも自由に使える僕達は、それだけでとても幸せです。人間の生命の根源である水を常に大切にし、水に対する感謝の気持ちを忘れることなく、水といっしょに生きていきたいと思います。